

―講座の概要、役割は。―
当大学院では2023年12月、地域医療学と家庭医療学、総合診療医学に関する講座「地域・家庭医療学分野」が新設されました。一方、大学院には徳島県が10年に設けた寄附講座「総合診療医学分野」があり、県立海部病院(牟岐町)に医師を派遣し、院内の診療や教育を支援してきました。私は前者の特任教授に就いた際、後者の特任教授

も兼任し、以来、二つの講座を一体のものとして運営しています。診療面では、臓器別に分類できない疾患や、多様な症状を訴える患者さんに対し、各診療科と連携しながら包括的な総合診療を実践しています。例えば「発熱と関節痛体重減少」を訴える患者さんには、症状を臓器単位で捉えるのではなく、全体像から診断に迫る姿勢が求められます。こうした全人的アプローチが、総合診療の本質です。研究面では、若手医師の県外流出の要因解明に取り組んでいます。徳島県は人口当たりの医師数が全国でも上位に位置しますが、年齢別にみると35歳未満の若手医師が少なく、地域医療を支える人材確保が課題です。アンケート調査の結果、「教

高齢者は疾患が複雑になりやすいため、全人的に患者を診る総合診療が求められる。高齢化と医師不足が進む地方では、その必要性がますます高まっています。八木秀介氏が特任教授を務める徳島大学大学院の講座は、この課題にどう取り組んでいるのだろうか。

も兼任し、以来、二つの講座を一体のものとして運営しています。診療面では、臓器別に分類できない疾患や、多様な症状を訴える患者さんに対し、各診療科と連携しながら包括的な総合診療を実践しています。例えば「発熱と関節痛体重減少」を訴える患者さんには、症状を臓器単位で捉えるのではなく、全体像から診断に迫る姿勢が求められます。こうした全人的アプローチが、総合診療の本質です。研究面では、若手医師の県外流出の要因解明に取り組んでいます。徳島県は人口当たりの医師数が全国でも上位に位置しますが、年齢別にみると35歳未満の若手医師が少なく、地域医療を支える人材確保が課題です。アンケート調査の結果、「教

講座クローズアップ

徳島大学大学院

地域・家庭医療学分野／総合診療医学分野

総合診療医を地域に根づかせたい

育プログラムや指導医への信頼は高いが、生活環境への不安」が県外志向の主因であることが明らかになりました。この研究成果をもとに、県と協働しながら、魅力ある生活環境の整備に取り組んでいます。医師を地域に「根づかせる」こと。それが使命です。

―教育面の取り組みは。―
日本専門医機構の新専門医制度に基づく「徳島大学AWA広域総合診療専門研修プログラム」を運営しています。これは、県内の中核病院からクリニックまで多数の医療機関と連携し、専攻医が自ら希望する研修先を自由に選べる仕組みです。こうした地域医療の研修で、患者さんの社会的背景や心理的背景までも感じられる実践的教育を行っています。例えば離島では救急搬送に漁船が使われるなど、地域ならではの医療の実態を間近に学ぶことができます。また、地域では医師だけでなく看護師、ソーシャルワーカーなど多様な職種が一体となって医療を支えており、その現場で得られる経験はチーム医療の本質を理解する貴重な機会となります。

県立海部病院で深刻な医師不足に陥っていた08年、住民が「地域医療を

守る会」を結成しました。当講座は同会と連携していますが、今後は一歩進めて、研修医が地域の方々に向けて実習成果を発表するなど、双方の対話を深めていく方針です。加えて現在、学部4年次に行う地域実習を1年次から導入し、より継続的な実習にできないか検討しています。

当大学医学部は09年度から入試で「地域特別枠」を設けていますが、9年間の義務年限を終えた医師の中から、地域の常勤医として勤務を継続する人が25年度に初めて出ました。講座の取り組みの成果と考えています。

―今後の目標は。―
徳島大学には、初代学長の書「学者如登山(学ぶは山を登るが如し)」が刻まれた石碑があります。学び続けることで視野が広がり、より高みに到達できるという教えです。総合診療も同様に、医学的知識や手技に加え、患者の生活環境や地域性を生きてきた歴史から多くを学び取る学問です。そこが総合診療の魅力で、し活躍の場を広げる鍵でもあります。これを若い医師に感じ取ってもらい、患者さんを包括的に診る医師として地域に残ってくれば、これ以上にもう少しはいいことはありません。



やぎ しゅうすけ
八木 秀介 特任教授

1998年愛媛大学医学部卒業。米ロチェスター大学留学、徳島大学大学院地域医療人材育成分野特任教授、公立学校共済組合四国中央病院循環器内科部長などを経て、2023年から現職。